平成 16 年度協働型政策検討システム推進事業報告書

# 木育（もくいく）

## ～ 木とふれあい、木に学び、木と生きる ～

近年わが国では、利便性や経済効率の追求等による生活環境と自然環境の変化によって、人と人、人と自然、人とモノ、モノと自然とのつながりが希薄となり、社会や自然にさまざまな「ほころび」が生じています。

私たちの身のまわりでは 1 枚の紙から家具、建築にいたるまで、木から生まれた製品が使われていますが、そのモノの素材になった木を、さらにはその木が生きていた森を想像できる人はどれだけいるでしょうか？
また、木が、私たちが使う資源の中で唯一、自然と人間の力で再生される循環資源であることに重きを置く人はどれだけいるでしょうか？

森林資源の保全と活用のバランスがとれた「木の文化」は 古来受け継がれてきた日本の文化であり、「適材適所」に木を使ってきた知恵と技（わざ）によるものです。
それは自然と共生して暮らしてきた北海道の先住の人びとの文化とも相通ずるものと考えられます。
しかし、現在のわたしたちの社会にこうした「木の文化」がしっかりと継承されているとは言えません。

私たち木育プロジェクトは、豊かで美しい森林に恵まれた北海道から発信する「木とのふれあい」のなかに、さまざまな可能性を見いだすことを試みました。

子どものみならず、すべての人びとにとって、木と五感でふれあうことが、自然や人とのつながりの回復に結びつくこと。
手でつくり、手で使う経験を通して養われる感性や想像力が、人や自然に対する「思いやり」と「やさしさ」を持つことにつながること。
こうした経験を蓄積し、知恵と技術を培うことが、自然と人が共存して生きる「持続可能な社会」を生み出す力となること。

私たちは、木を子どもの頃から身近に使っていくことを通じて、人と、森や木との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育てたいという想いを「木育（もくいく）」という言葉にこめました。

子どもをはじめとするすべての人びとが、木とふれあい、木に学び、木と生きる。
それが「木育（もくいく）」です。

平成 17 年 3 月

木育推進プロジェクトチーム

## Ⅰ　今、なぜ「木育」なのか？

### １．木育の背景

（１）暮らしに生かされない北海道の森林・木材資源

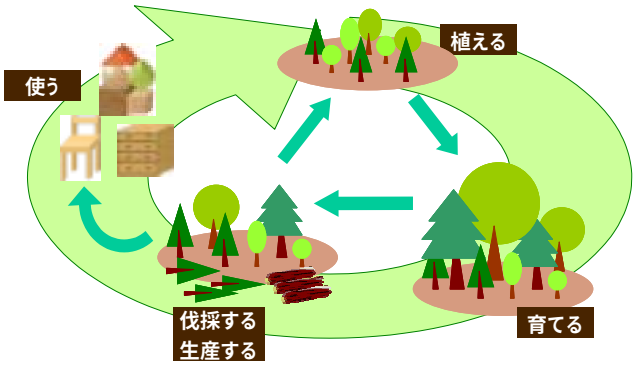
北海道では、森林が総面積の約７割を占め、私たちに最も身近な資源でありながら、生活用品の多くをプラスチックや金属などの工業製品が占めるようになり、国産の木材は外国産材との低コスト競争に押されて自給率が低迷するなど、この豊かな資源を生かす知識や技術、ライフスタイルが「木の文化」として十分に育まれ、私たちの暮らしに定着しているとは言えません。木についての豊かな経験をもつ職人の高齢化も進んでおり、そのノウハウの継承も急がれています。

一方、社会・経済のグローバル化や都市化の進展など、私たちの暮らしを取り巻く環境も大きく変化してきました。生活の利便性や選択性は飛躍的に高まり、個人のライフスタイルや価値観の多様性を生み出してきましたが、他方で効率重視型の社会を加速させ、地域においては少子高齢化や核家族化の進展とともに、近隣をはじめとする人々の関係を希薄なものに変えてきました。

これらを背景に、私たちの暮らしにおいては、手間ひまかけた「モノづくり」や、人と関わり合うことによる「遊び」や「学び」の大切さ、木や緑に囲まれたゆとりある空間や景観への配慮など、豊かな人間社会の形成に大切な感性や社会性を育む場や機会、価値観が失われようとしています。

（２）森林や環境・経済活動への“あいまいな正義”

森林が地球温暖化防止などに果たす公益的機能への関心が高まる一方で、「木を伐ってはいけない」、「木を使うことは悪いことだ」といった意識が根強く、気候や土壌などにより国や地域で異なる森林の現状や、植え、育て、伐り、使いつつ、また植える森づくりのサイクルなど、森林の保全や活用に際しての適切な知識や経験が十分に理解されているとは言えません。



木の一生（森林・木材の循環）

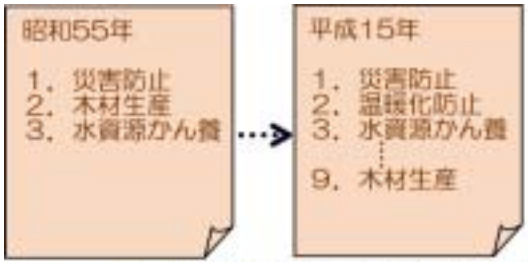
このような、根源に正義感を伴うような抽象的で不十分な認識は、森林の維持管理はもとより、木と関連する経済活動、地球環境保全などに対し、負の影響を及ぼす可能性すらあります。

例えば、国産の「割り箸」が、木材資源の有効活用や森林の間伐などに役立っていることが知られていない「割り箸不要論」もその一つでしょう。

生産者と消費者の顔が見えない関係が、身近な消費活動の中で、一般化しつつあります。

これは、つくる人と買う人、使う人が別の方向を向き、お互いの信頼を確認できる機会が少なくなってきたことでもあります。

森林に対する期待の推移



森林と生活に関する世論調査（内閣府）

木製品を見ても、それが「どこの木であるか」、「誰がどのように作ったものか」、「どのような過程を経てきたものか」を知る手掛かりが限られており、このような生産者と消費者の歩み寄りの不足は、消費者の道産木材への関心や製品に求める期待をさらに低下させることにもつながりかねません。

## ２．木育の必要性

### （１）木のもつ魅力

| 木は人にやさしい | 木は身近な素材 | 木は循環する再生資源 |
|---|---|---|
| 【主な特徴】<br>・細胞の中に多くの空気を含み、断熱性や保温性に優れる（木のぬくもりを感じる）<br>・紫外線を吸収し、赤外線を反射させる（目にやさしい）<br>・音を吸収、分散により、音をまろやかにする（耳にやさしい）<br>・衝撃をやわらげる（クッション性）<br>・カビや結露を抑える調湿作用があり、発散される匂いや成分には雑菌や害虫を寄せ付けない<br>・体をリラックスさせる | 【主な特徴】<br>・北海道の森林面積は、総面積（北方領土を除く）の 71%（H15）を占めている<br>・木は形を変え（自然木の状態、木材の状態、木製品の状態）身近に存在している<br>・切る・削る・割る・砕く・磨くなど、使用する道具や方法にあわせた加工の容易さ<br>・燃料としての活用（日本の薪炭材需要量　S57：1,852 千ｍ3→H14：653 千m3） | 【主な特徴】<br>・木は育つ過程で CO2 を吸収し、蓄積する。CO2 の吸収能力は成長力の旺盛な若い木ほど優れている<br>・木材燃焼時に放出される CO2 は、もともとは木が大気中から吸収したもので CO2 収支は変わらない（カーボンニュートラル）<br>・製造・加工の際に必要なエネルギーが、プラスチックや鉄など他の資源と比べ小さい<br>・木材は再生資源であり、循環利用が可能な資源である |

### （２）木のもつ多様な可能性

■木に囲まれた生活空間を整えることや、いつでも木にふれることのできる暮らし方は、私たちの心や体を健やかに保ち、育みます。

■木は長期間かけて育ち、長期間の使用が可能で、時間の経過とともに記憶や歴史、愛着など人の営みとの深い絆を生み出します。

■木は立木や木材、製品など様々な形で存在し、多様な暮らしや活動、遊びを生み、人々に大きな恩恵をもたらし、家庭や地域、社会に貴重なつながりを生み出します。

■森林には水源涵養、二酸化炭素の吸収・固定、保健休養機能などの人間が生きていく上で不可欠な機能があり、環境が重視される社会においては木の重要性がますます高まります。

### （３）今、なぜ木育なのか？

①感性や社会性を高める場として

木のぬくもりや扱いやすさ、植え育てることのできる命の営みの体感、森林を舞台とした遊びや体験・学習など、存分に想像力や創造性を発揮できる場や機会を、私たちの北海道から提供・発信していくことが、感性や社会性を育むことの大切さを社会に気づかせるきっかけとなります。

②北海道の「木の文化」を育むために

私たちが、今、どんなにささいなことからでも身近に北海道の木を使っていこうとする姿勢をもつことが、私たちの暮らしと木の関係を密接なものに変え、北海道の木材自給率※４０．６％（Ｈ１５実績）と低迷する北海道の林業や木材産業の底上げにつながるとともに、北海道ならではの「木の文化」を育む原動力となります。

※木材自給率＝道産材供給量／道内の木材総需要量×１００

③森林や環境に対する認識を高めるために

今、私たち一人ひとりが、森林や木材が循環利用可能な再生資源であることや、伐っても良い木と、そうでない木の確かな認識を持つことが、北海道や日本という規模からの地球環境保全につながり、循環型社会形成にも役立つものとなります。

## Ⅱ　木育の基本理念

### １．木育が目指すもの

（1）「木育」とは

木育とは、子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取組です。それは、子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むことです。

（2）木育がめざす人づくり

■五感と響きあう感性を育みます

木と五感で「ふれあう」ことにより感性を高め、「手でつくり、手で使い、手で考える」経験を通して自分自身を大切にすることを知り、人や自然に対する『思いやりと、やさしさ』を育みます。

■共感を分かち合える人づくりをめざします

身近な人と一緒に木で遊び、木に学び、木でモノをともにつくる体験を通じて、楽しさや喜びを実感し、共感を分かち合い、それが私たちの暮らしを支える地域や社会、産業への関心へとつながるような人づくりをめざします。

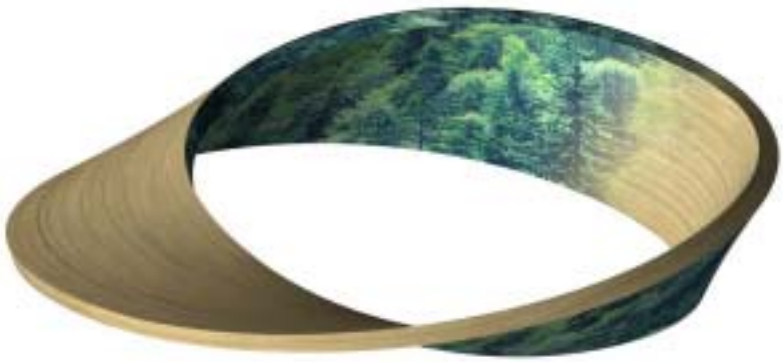
（3）木育がめざす社会

■地域の個性を生かした木の文化を育みます

北海道においては、古来より受け継がれてきた人と森や木との関わりを見直し、この地に自然との関わりの中で生きてきた先住の人々の暮らしかたに学び、北海道の「木の文化」の構築をめざします。

■人と自然が共存できる社会をめざします

すべての人が思いやりとやさしさをもち、地球という大きな『つながり』のなかで自然と共存し、人間らしく生きることができる社会を実現します。



**美しいメビウスの輪**

森に生きる樹木と、日常に根ざす木材。もともと一つの木でありながら、人の営みや見方がどちらかに偏ってしまうと、その“つながり”が見えづらくなります。

木育は、木との関わりを通じて、私たちがこの“つながり”を実感するための取組でもあります。

私たちは、それを、美しい「メビウスの輪」になぞらえて考えました。

## ２．木育の取組フィールドとプロセス

### （1）木育の取組フィールド

木育は、人と、木や森との関わりを見つめ直し、それぞれの“つながり”を再構築しようとする取組であり、3 つのフィールドから考えることができます。

**感性や社会性を育む取組フィールド**

木製遊具や木の道具等にふれ親しむことによる五感の育成
森林に親しむことによる情緒の育成
森や木による「遊ぶ力」と社会性の育成
木や緑に囲まれた施設、住環境、街並みや景観の形成
木を介した地域経済やコミュニティの活性化

**人と木のつながりを育む取組フィールド**

北海道の木の文化や技術の再発見・再評価と伝承
地域の個性を生かした新たな木の生活文化の創造・育成
木材と地球環境に関する知識の向上
木によるモノづくり教育の推進
つくり手と買い手、使い手の顔の見える関係づくり

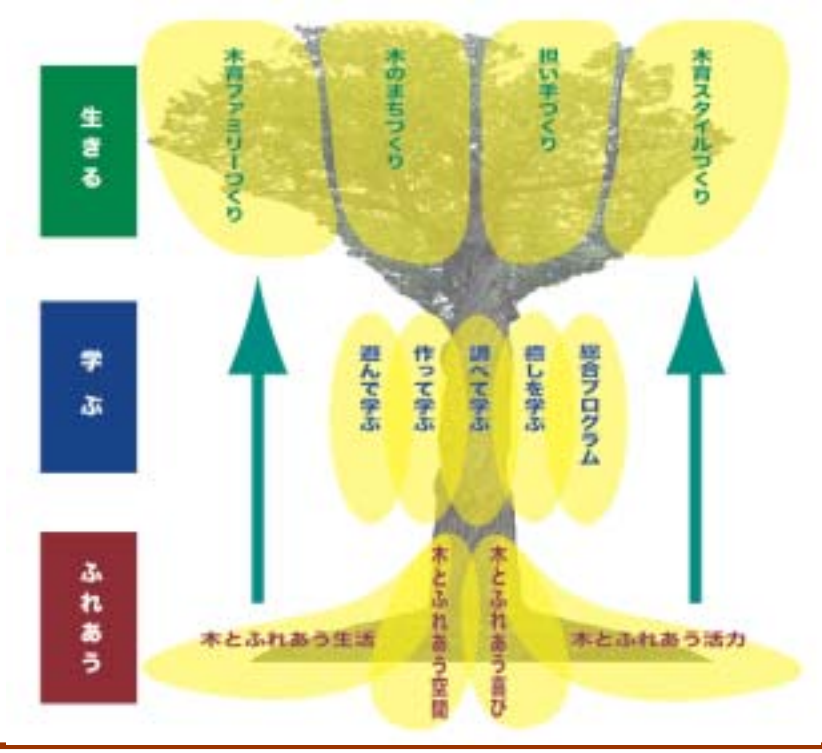
**人と森のつながりを育む取組フィールド**

森林づくりと木材生産・利用のサイクルの理解に向けた森林体験や学習等の推進
森林と地球環境に関する知識の向上

### （2）木育の展開プロセス

木育の展開は、「ふれあう」「学ぶ」「生きる」の三段階のプロセスで考えられます。

| | |
|---|---|
| 木とふれあう | 気軽に木にふれ、木に包まれることで、木の良さを感じるプロセス |
| 木に学ぶ | 木や森林について関心を深め、知識や技を身につけるプロセス |
| 木と生きる | 家庭や地域、社会で木育が実施・継続されるようにしていくためのプロセス |



## Ⅲ　木育の取組の提案

### １.「木とふれあう」ための取組

（１）取組のねらい

**「 いつでも、どこでも、だれとでも、木とふれあう 」**

心の健やかな発達のために、木の道具を使うことや生活空間に木を増やすこと、木や森と積極的に関わることで、「五感と響きあう感性」をバランスよく育むことをめざします。

（２）取組の提案

**①木とふれあう生活 ―― 木に気付く生活・「木付き生活」のススメ**

イ）人生の節目に、年齢に合った「木のもの」をプレゼント

ロ）木の道具・生活・文化のレッドデータブック作成

ハ）日常生活を過ごせる森づくり

・かくれんぼの森 道内ベスト１０　・木登りの木 道内 100 選

**②木とふれあう空間 ―― 木のモノに囲まれた空間づくり**

イ）木と緑があふれる幼稚園・保育所 と 学校・公共施設などの整備

・北海道型「（仮称）子ども未来づくり施設」の構想

・木と緑にあふれた幼稚園や保育所

ロ）木製遊具・アトラクションづくり

**③木とふれあう喜び ―― 木遊びで「つながる」人の輪**

イ）母親木育学級からはじめる、木遊びによる子育て

ロ）木遊び関連施設の整備とネットワーク化

・木遊び関連施設の整備　・移動「木遊びランド」づくりと組織化

・木遊び施設と木遊び場のネットワーク化

ハ）木遊びプログラムの開発と指導者の育成

**④木とふれあう活力 ―― 木で地域の個性をつくる**

イ）木の道具を使うスポーツ・遊びの振興

・羽子板・ユニバーサル・ビリヤード・スーパージャンボ百人一首

ロ）私のまちの木再発見

ハ）北海道森と木アートフェスティバル

・北海道「森と木」アート賞（グランプリ・金賞・銀賞・銅賞）

・森と木アート・フェスティバル

**「 感じてほしい、こんなこと・・・」**

・木に触るといい気持ち　・木目っていろんな形に見えて面白いよ　・木の匂いがした
・軟らかい木と硬い木があるんだね　・木のある場所は心が落着く　・すべすべ や ざらざら
・暑い日の木はちょっと冷たくて、寒い日の木はちょっと温かい　・木にはいろんな色があるよ
・年輪をかぞえたら長生きだった　・古くなった木は風格がある　・割りばしは木の味がする
・木の音はやさしい音　・冬の木は寒さに耐えて生きている　・穏やかに木が癒してくれる
・木は人の心をやさしくします　・家族のように、友達のように、恋人のように想う
・伐られてからも年を重ねる　・みどりっていいな　・木と語りあう　・木に寄りそう

## ２．「木に学ぶ」ための取組

（１）取組のねらい

**木の教材化・学びの木育化**

北海道の森林と道産の木材、それらを取り巻く社会環境には、教材として活用できる魅力的な素材があふれています。

木や森との遊びや日常的な関わりの中から、森や木を身近に感じる心根をつくり、森や木と自分とのつながりに気づき、モノを創造する知恵や力を培っていくため、これらの素材を学校や地域のさまざまな学びの中に取り入れ、北海道らしい教育スタイルを作り上げます。

（２）取組の体系

**①遊んで学ぶ ―― 森や木とのつながりを作る**

イ）森の学校化・森の学び舎化（幼稚園・保育園、地域での取組）

・「感性豊かな子どもを育てる」ための協働の森づくり

・園舎や教材に「木」を多用

・森や木を活用したプログラムの開発と実施

ロ）共育木（きょういくぼく）のすすめ（小・中学校を中心とする取組）

※共育木：学校入学時に植え、児童が自分たちで育て、将来にわたり学校・地域とつながる

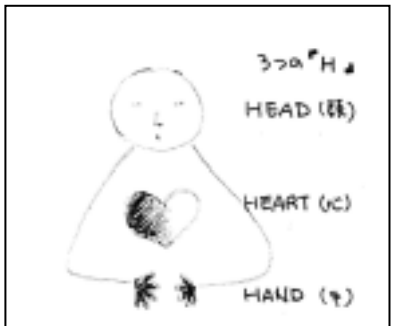
**②作って学ぶ ―― 手作りによる技と知恵、感性の獲得**

イ）気軽に木によるモノづくり

・枝や端材、木工道具が自由に使える「トンカチ広場」の学校への設置／材料、道具、指導者が揃った「貸し工房」の設置

・機械の使い方ワークショップ、丸太材の対面加工販売、製品即売会等の「青空市」の開催

ロ）森の恵みや木で手作りする楽しさを四季折々に学ぶ、「木育スクール」の開設




モノづくりは
３つの「H」の総合活動（ゲーテ）

**③調べて学ぶ ―― 気づきから探求へ**

イ）あなたの森や木に対する素朴な疑問に答える「（仮称）森と木の探偵団」

ロ）森林から木造住宅や家具、紙製品までの道のりをたどる「木育ツアー」

**④癒しを学ぶ ―― 木育療法～ウッドセラピー～のすすめ**

イ）木の癒し効果の科学的検証、プログラム開発、場の整備

ロ）木育療法の専門家「木育療法士」の養成研修・資格認定

ハ）癒しの場づくり（木の癒し体感スペース「木療フロア」）

「木の砂場」で大人の癒しを

**⑤木と森林を学ぶ総合プログラム**

**～赤ちゃんから高齢者まで全ての人に「木に学ぶ」機会を～**

イ）木育リゾート（幅広い年齢層の方々が、思い思いにまたは一緒に「木育」を体験）

ロ）木育キャンプスクール（親子で参加するサマーキャンプ・ウィンターキャンプ）

ハ）「森で遊ぶ・森で学ぶ」協働事業

## ３．「木と生きる」ための取組

### （１）取組のねらい

**木に根ざした「地域」「社会」の形成**

「木育」の概念及び「木とふれあう」「木に学ぶ」で提案された施策を社会に打ち出し、具体化させ、広く浸透させるためには、様々な視点からの道筋作りが必要となります。木育を息の長い活動とし、私たちの生活が木に寄り添った、木と共に生きるものにするため、４つの仕組みづくり(普及啓発、場の提供、担い手作り、ライフスタイル)を提案します。木を通じた暮らしの中から人間が本来生きるための本質的な力を呼び起こします。

### （２）取組の提案

**①木育ファミリーづくり――木育の普及活動**

イ）メディアによる情報発信

・絵本作り・テレビ番組企画づくり

**②木育のまちづくり――ふれあいの場の提供**

イ）地域コミュニティー木育拠点の協働育成

・ 大人の集い場『木育バー』・現代版寺子屋『トンカチ工房』・日曜道具製作所

・ 公園の木製遊具(木馬・木牛・木羊)

ロ）木と生きる“北海道“をめざす「木育のまち選定・木育による地域づくり」

・ 地域活動の支援

・ 木のモデル都市選定

**③木育の担い手づくり**

イ）取組の評価方法の確立

・ 木育度チェックシートの浸透

ロ）木育道を極める制度づくり

・ NPO，企業への体験入学・コーディネーターの養成

**④木育スタイルづくり――ライフスタイルの提案**

イ）木育スローライフのススメ

・住宅設計コンテスト～ライフスタイル

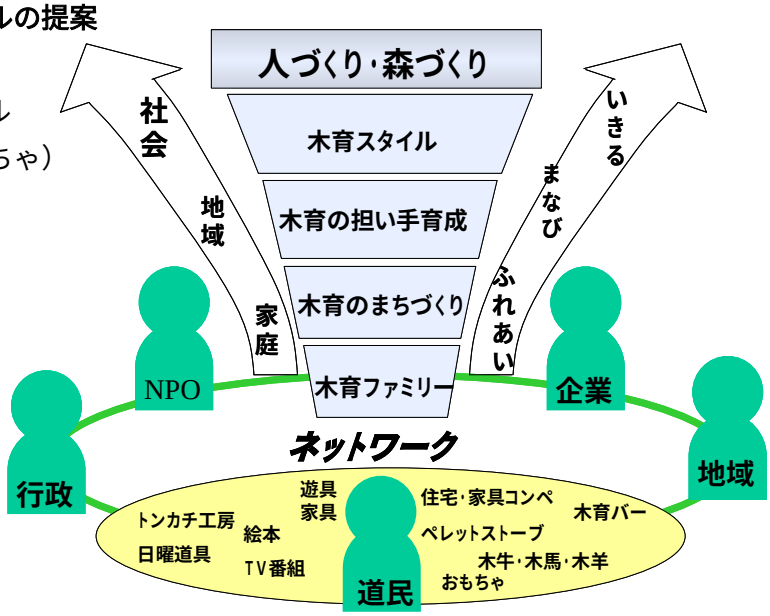
・木育デザインアワード（家具・おもちゃ）

ロ）新たな道具の開発・普及

・ペレットストーブの普及

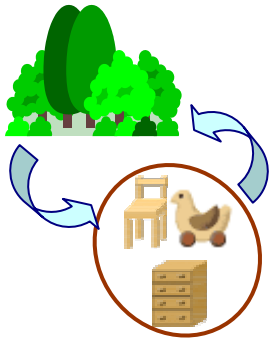
ハ）地材地消の協働推進

・木材利用ネットワーク



## Ⅳ　木育を進めるには

### １．何から・どのように始めてみるのか



（1）身近な木のモノから森への“つながり”を自分で考えてみる

「木育」は、人と、森や木との関係を見つめ直し、その“つながり”をつくっていくことです。

身近にある木のモノを手に取り、そのモノを作ったのは誰か、材料となる木はどこから・どのようにやってきたのか、それは海外の森林なのか・日本の森林なのか、その森は豊かな森なのか…

木のモノから、それが生まれた森へと想いを馳せることが、人と、木や森との“つながり”を考えることにつながります。

（2）家庭や学校など日常生活の中で、木や森との“つながり”を見つける・つくる

家庭や学校などの中で、木や森との“つながり”はあるのか見つめ直すとともに、新しい“つながり”をつくってみることも、「木育」の取組です。

- 木のモノの良さを見直し、暮らしの空間や道具へ木を使ってみよう。
- 暮らしや遊びを通して、人と森や木との関わりについて子どもと考えて共有してみよう
- 授業や教材へ森や木を活用して、モノを創造する力や知識を育てよう
- 建物の木造化や内装の木質化、身近な森林での植栽など、木や森に囲まれた環境づくりを進めよう

（3）　みんなが取り組んでみたくなる「木育」のプロジェクトを、力を合わせながら進める

みんなが取り組んでみたくなる「木育」のプロジェクトを、仲間のみならず、地域の住民や企業・ＮＰＯ等にも広げて支え合い、力を合わせて進めていくことで、新たな楽しさやうれしさを共有することができます。

さらには、地域の森林や産業、親子や高齢者の状況、人びとの関わり方などを踏まえて、取組を考えていくことで、その地域独自の・その地域ならではの「木育」を展開することもできます。

「木育」は、人と、木や森の“つながり”のみならず、地域社会全体が協働して取組を進めていくことで、人と人の“つながり”や地域社会づくり、コミュニティの活性化をも図れる可能性を持っています。

### ２．これからの着実な展開に向けて

北海道から発信される「木育」は、いわばスタートラインに立ったばかりです。

「木育」がめざす人づくり・社会づくりを進めるためには、一過性の・特定の人びとの取組ではなく、道民の暮らしや営みに根付いた運動を進めることが大切です。行政にはそうした運動への支援策をはじめ、必要な取組を息長くかつ総合的に進めていくことが求められます。

（1）「木育」の積極的な発信

■　「木育」は新たな言葉・新たな考え方であることから、「木育」に関連する取組や情報が、より多くの道民の目にふれることが重要

■　木育の理念や取組事例などについての情報収集やホームページ等による情報発信

（2）「木育」の推進方針や行動計画の策定・推進

■　「木育」がめざす人づくりや社会の実現に向けて、行政の取組方針や具体的取組を明確にし、家庭・学校・企業・地域が取り組む木育の取組を支援するなど、必要な対策を着実に実行していくことが重要

（3）「木育」パイロットプロジェクト

■ 情報発信のみならず、目に見える具体的な取組について、短期的～中・長期的な視点に立って検討・支援することで、取組機運の醸成を図ることが重要

**森の恵みや木で手作りする楽しさを四季折々に学ぶ「木育スクール」の開設**

● １年間を通して定期的に開催する「木育スクール」
- 森の四季を感じ、四季毎の森の恵みを学び味わう（山菜、花、紅葉、実、冬の焚き火　等）
- 季節毎の森林づくり作業を体験（春・秋～地拵・植栽、夏～下刈、冬～調査・伐採　等）
- 自分で手に入れてきた木材等で、日用品や家具づくり（伐採～乾燥～加工まで実施）　等

● 夏休み・冬休み等で集中的に開催する「木育合宿」
- ３日～１週間程度、泊まり込みで実施
- 森林づくりや木材加工の技術、実際の林内作業や作品製作を実施

● 「木育講座」「木育合宿」を継続的に実施していけるしくみづくり
- 継続することで、受講希望者を掘り起こすことが可能

**木と緑があふれる幼稚園・保育所 と 学校・公共施設などの整備**

● 自然豊かな北海道の特性を活かした施設づくり
- 道産材を活用した木造の施設づくりや多様な木のおもちゃ、木製遊具の活用
- 森の中にある施設、または森がすぐそばにある施設
- 森林所有者やＰＴＡ、地域住民が感性豊かな子どもを育てるために、協働で施設周辺の森林を管理　等

● 森や木を活用したプログラムの開発と実施
- 感覚と身体の発育プログラム（木登り、ブランコ、山坂での活動　等）
- 地域に伝わる木を使った遊びの伝承（高齢者とのふれあい）、小・中学生との木工体験　等

**木と生きる“北海道“をめざす「木育のまち選定・木育による地域づくり」**

● 木や森と共に生きるまちづくりや地域活性化への取組の選定・地域づくりへの支援
- 「木育のまち」選定による当該地域の取組意欲の向上、活動の活発化
- 地域からの「木育」提案に対する地域づくり活動への総合的支援（人・モノ・お金・情報等）
- 協働による地域の木育コミュニティ拠点づくり実験

● 数世代後を見据えた、木にまつわる新たな北海道の生活文化の創造・育成への支援

c.f.）岩国市の錦帯橋…1673 年創建の日本三名橋の一つ。主要部分には木材しか使っていない。図面に頼らず橋を組み上げる職人の技は、大工達に伝承されていくもの。

下諏訪町の御柱祭…日本三大奇祭の一つ。奥山から伐り出した大木“御柱”を急斜面に落とす木落しが有名。坂を落ちる御柱に乗ることが男意気とされている。

（4）「木育」推進組織の設立

「木育」がめざす人づくり・社会づくりを進めるためには、「木育」の取組支援や情報提供、主体間のネットワーク化の促進等の役割を担い、家庭や学校、地域、企業、行政等の取組主体を有機的・効果的・円滑に結びつける木育の推進組織が求められます。

そのため、ＮＰＯ法人など新たな推進組織の設立または既存の組織の活用などを検討する必要があります。

なお、推進組織の立ち上げまでは、行政等がその役割を代替する必要があります。

（5）木材を使うことの総合的価値の発見・認識

木を使う意義や必要性への理解を促進するためには、木を使うことによるメリットを明確に示すことが必要だと考えられます。

そのため、森林や木材が人間の成長や心に与える影響の科学的分析をはじめ、森林の育成から木材・製品生産までのトータルコストの算出や他素材との比較検証、または地球温暖化防止の観点から、木材の伐採・運搬・製品の流通等における二酸化炭素排出量（ウッドマイレージ）の明示など、新たな手法の研究・開発を進める必要があります。

# 木育（もくいく）推進プロジェクト

【プロジェクトチーム】

| | | |
|---|---|---|
| リーダー | 財団法人 北海道環境財団　理事長 | 辻井　　達一 |
| | 札幌大谷短期大学保育科　助教授(美術担当) | 清水　郁太郎 |
| | 学校法人 北邦学園　理事長 | 瀬川　　五水 |
| | NPO 法人 北海道子育て支援ワーカーズ　代表理事 | 長谷川　敦子 |
| | NPO 法人 ねおす　専務理事・コーディネーター | 宮本　　英樹 |
| | ＫＥＭ工房　主宰 | 煙山　　泰子 |
| | 株式会社 北樹　代表取締役 | 菅　　義則 |
| | コクヨ北海道販売（株）開発本部　副部長 | 山本　　憲哉 |
| | 木の芽書房　編集プロデューサー | 箱崎　　岩男 |
| | 帯広市 緑化環境部公園と花の課 みどりと花のセンター　主任 | 堀江　　一 |
| | 厚沢部町 企画商工課企画係　主査 | 古谷　　和之 |
| | 北海道立林産試験場 利用部材質科　研究職員 | 根井　　三貴 |
| サブリーダー | 水産林務部木材振興課　主査 | 濱田　　智子 |
| | 保健福祉部子ども未来づくり推進室　主査 | 永瀬　　哲朗 |
| | 教育庁生涯学習部小中・特殊教育課　指導主事 | 渡邉　　直樹 |
| 事務局 | 知事政策部参事、水産林務部木材振興課 | |

【検討の経過】

| | |
|---|---|
| 第１回プロジェクト会議（平成１６年９／６） | 木育の意義、理念、検討の方向等について |
| 第１回プロジェクト会議（１０／７、８） | 現地検討会（西興部村、下川町、音威子府村） |
| 第３回プロジェクト会議（１１／５） | 木育の必要性と対象範囲について |
| 第４回プロジェクト会議（１２／１６） | 木育の取組方策について |
| 第５回プロジェクト会議（平成１７年１／１３） | 木育の取組の提案について |
| 第６回プロジェクト会議（２／１５） | 報告（骨子）案について |
| 第７回プロジェクト会議（３／１８） | 全体取りまとめと、今後の展開について |
| ★北海道木育（もくいく）フォーラム（３／１９） | |
| 第 8 回プロジェクト会議（３／３０） | 最終取りまとめ（知事への検討結果の報告） |

【お問い合せ先】

**北海道木育（もくいく）推進プロジェクト事務局**
■電話　０１１－２３１－４１１１（代表電話）
北海道知事政策部参事（政策企画）　内線２１－１８３
北海道水産林務部木材振興課（林産振興グループ）　内線２８－４６７
■FAX　０１１－２３２－６３１３（知事政策部）
■電子メール　sogo.seisaku1@pref.hokkaido.jp